

影写と筆

—より良い影写本を残すために—

小稿は、わたしが長年にわたって携わってきた影写業務の経験の一端を報告するものである。すなわち、古文書の影写にあたっては、それに用いる筆の探求・選択がいかに肝要であるかを示したいと考える。

一

青蓮院門跡で能書の誉れ高い尊円親王(一二九八—一三五六)の著書『入木抄』の御筆の事の一節に、

お手習にも、よき筆よろしく候也、御筆、手本の筆と相違し候へば、字形も似ず候、御本に相応の筆よろしかるべく候也、

とある。このように、古来より手習いの基本の一つは、まずお手本に相応した筆を選ぶことにある。書道における筆の選択は、その出発点から肝要なのである。そのことはもちろん現代でも変わらない。

のみならず、学書も進んでかなりの書き手になると、たとえそれが古典の臨書であっても、自分の意図によって、剛毛の筆を使ったり、羊毛の筆を使ったりする。用筆の選択は芸術的・創造的な表現には不可欠であり、それによって書道の表現領域の深さを出してみることができるのである。

しかしながら、私が業務で行っているのは影写である。影写では、対象(古文書)から一步も離れることは許されない。その古文書を忠実に

斎藤治朗

敷き写すことが仕事だからだ。もしも用具が違えば、それだけ対象から遊離してしまうことになる。離れば、当然修正(手直し)を余儀なくさせられる。だから、筆の選択は決しておろそかにできないのである。ということは、影写にあたっては、当該古文書でどのような筆で書かれているかを判断しなければならないわけである。

たとえば、尊円親王と後光厳天皇との勘返状(写真1、部分)の場合がある。これを影写する場合には、幸いにも尊円親王の文章五行目に「兼又、雀頭十管進上」とあるのが参考になる。これによって、この書状が雀頭筆(写真2-a)で書かれていることがすぐに推察できる。早速雀頭筆を用いて揮毫してみると、その線質が表現できたのである。

このように古文書の中にはっきりと筆のことが記されていれば、それが手掛りとなって、仕事は楽である。しかし、わたしは多年影写の仕事が続けてきたが、そんな僥幸に巡り合ったことは絶無であったといってもよい。殆どの場合、それぞれの古文書に使われた用筆を、わたしなりに推定しながら、影写してきたのである。

二

さて、本稿で紹介するのは、わたしが十数年間にわたって続けてきた広橋家文書の影写の経験のなかからのものである。

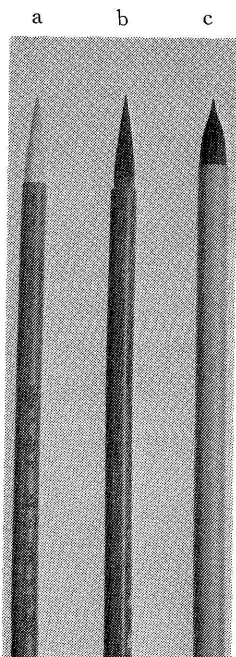


写真 2

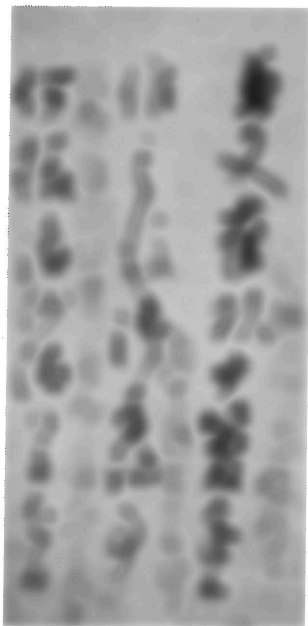


写真 1

従来わたしは、いろいろなタイプの和筆を買い揃え、それらを適宜選
択して影写作業を行ってきた。広橋家文書の影写についても、手持ちの
いろいろな和筆(写真2―b)を用いて何とか影写してきた。が、最近
手にした兼秀公記(宿紙、写真4)については、これまで使用してきた
多くの和筆では、どうしてもちょっと表現しえないものを直感したので
ある。そのため所在ない空白の時間がしばらく流れた。しかし、それが
結果的に唐筆への着眼につながったのである。

解放後の中国の書道文具は、近來大量にわが国に輸入され、しかも極
めて安価なために、今日の書道愛好家たちの間では一種のブームとなっ
ているようである。が、それらが粗悪なために、私の場合は、以前より
関心は薄く、硯と紙以外は和製に終始していた。しかし、影写の方が手

付かずの状態になってしまっていたので、試みに唐筆(小)を各種求め
てきた。そしてそれらを次々に使用してみた。その中の円筆というか、
鋒先に肉のある筆を下筆してみると、原本である兼秀公記の書線の感
じがよく表現できたのである。柔和でふくらみのある線、宿墨³に水を薄
めて書かれているようで、柔らかい味がさらに倍加する。これこそ原本
(写真4)の線質である。逆に言えば、原本は恐らくこのような唐筆で
書かれたのだといえるだろう。かくて、従来の和筆では表現できない、
柔和で膨らみのある線が出せる独特な筆、宿純羊毛筆(小)(写真2―
c)に遭遇できたのである。

この筆の最も特徴的な部分を、従来使用してきた和筆と比較して示せ
ば、次の三点が指摘できる(写真3)。すなわち、①起筆のところにそ
の違いが現れるもの(Aグループ)、転折のところにその違いが現れる
もの(Bグループ)、③ふくらみのある線のところにその違いが現れる
もの(Cグループ)である。以下、具体的に説明しよう。

〔Aグループ〕

筆を紙につける始めの部分は、筆尖の当り具合によって、大別すれ
ば二様ある。一つは、たとえば縦線を書くのに、筆を下ろしたまま直

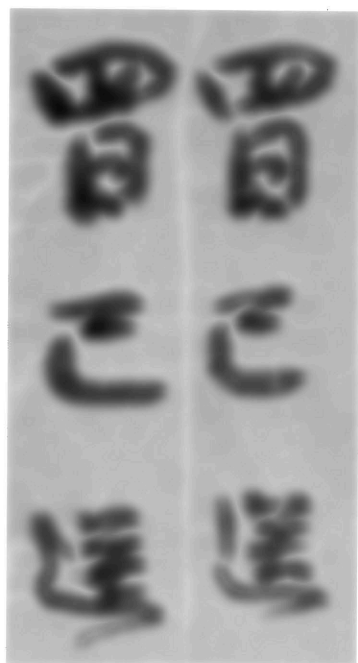
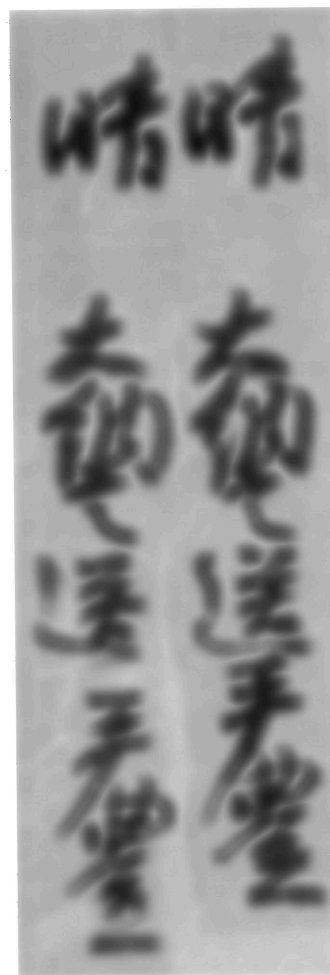
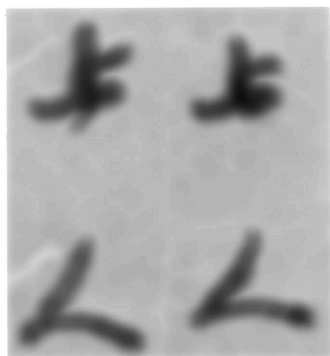


写真 3 Aグループ



ぐ下に引く場合であり、「四日己」の「四」・「日」のそれぞれの第一画の打込みの部分と「己」の第三画の縦線の筆尖の当り具合がそれにあたる。今一つは、逆筆である。筆を下から上に逆に押さえて、それから真っ直ぐ引き下ろす場合であり、「送」の乙の逆入の部分と「上」の縦線逆入の部分がそれにあたる。そのいずれの場合でも、c唐筆は、b和筆と比べて筆尖により肉がついているので、さらにボリュームが出るのである。「四日己」・「送」に注目されたい。

また、「人」の第一画目の起筆は藏鋒である。起筆に筆尖の当たった所の見えるのを露鋒といい、筆尖の当りが画内に藏れてしまうのを藏鋒というが、原本では、後者の藏鋒が随所に使われているので、自然に柔らか味のある丸い線質を感ずるのである。これを従来**b**和筆(小)で表現しようとすれば、無理な運筆となり修正を余儀なくさせられるのである。

〔Bグループ〕

たとえば、「晴」の隣の横画連綿線は、c唐筆ならならば原本のように楽にかけるが、右側の**b**和筆(小)によると堅いコブができる。和筆で似せて書くには、筆軸を廻わして方向を変えなければならぬが、元

来、毛筆は硬筆のように廻わして書くものではない、以下、「大納言送尹豊」のそれぞれの横画の連綿を参照してほしい。右の和筆で書いたものは、転折部分にコブが見られるのがわかるであろう。唐筆でないとは表現できない転折部分の例をさらに挙げれば、原本四行目の「今日又」・「禁裏」・「家君」とか、最後の行の「奏」などがあ

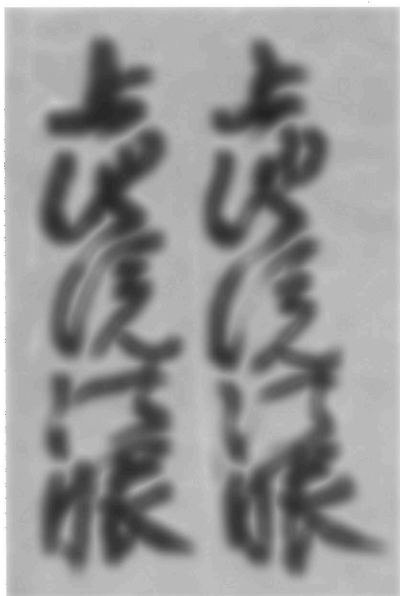


写真 3 Cグループ

写真 3 Bグループ

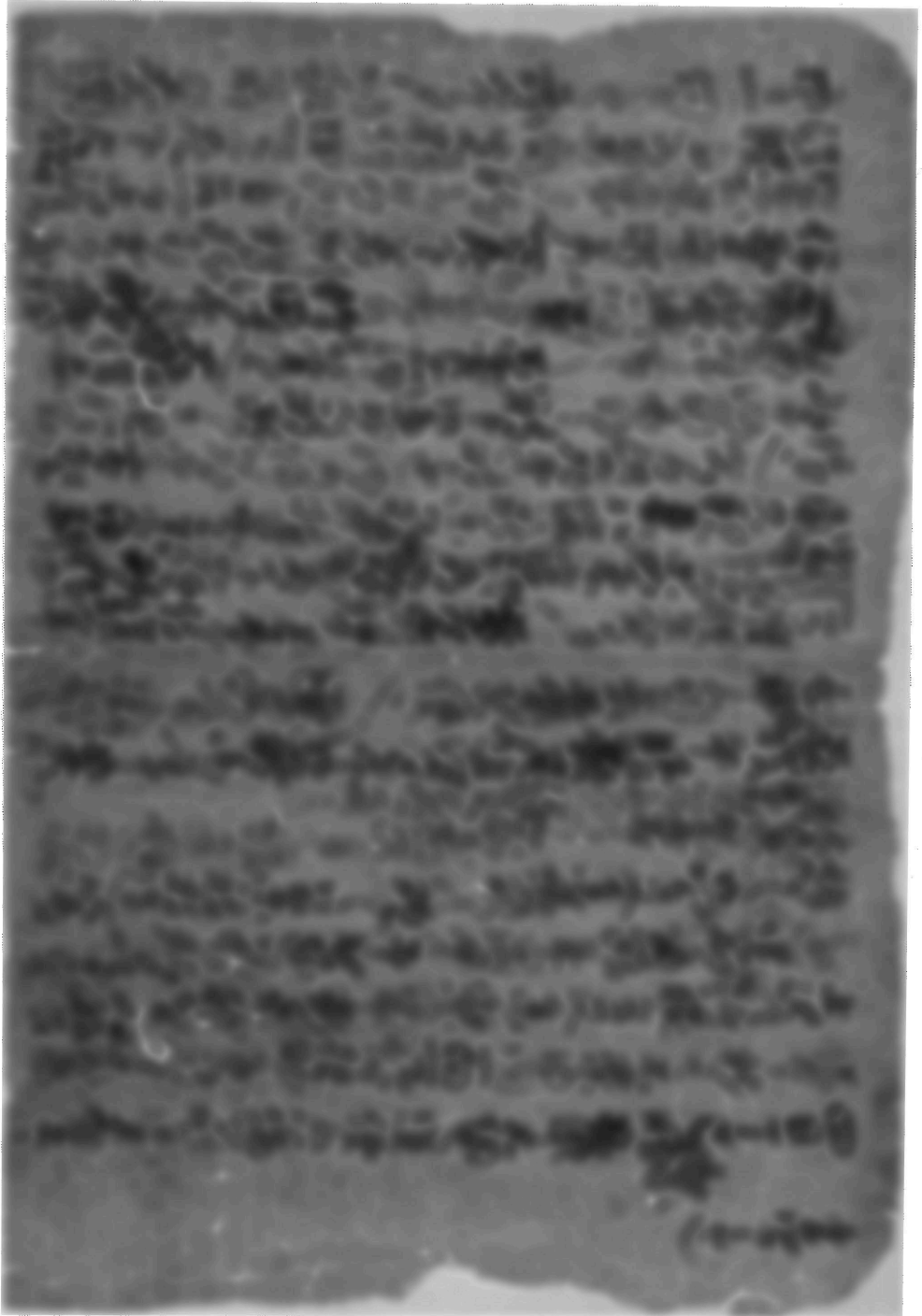




写真 5 兼秀公記影写

〔Cグループ〕

ふくらみのある太い線は、短鋒であればごく自然に書けるのだが、しかし、終筆の処理のところで、b和筆(小)とc唐筆の違いが出てくる。右側の和筆(小)による運筆では、「上池」の「上」の字の第二画から第三画に移る連綿が原本のように書けない。それに対して唐筆なら原本のように自然に書けるのである。また、「竹田法印」の「法」の扁から旁に移る横線、太い縦線から「去」に移る横線が、左側の唐津のように楽に引けなくてはならない。さらに、「印」への連綿も気持ち良く淡々と書ける筆でない駄目である。和筆(小)では息切れてしまうが、唐筆では可能なのが。短鋒特有の書線である。この例としては、三行目にある「向可仰」、六行目の「只今」・「以青」、九行目の「五日戊午晴」、十五行目の「被申御違見」、十六行目の「前管」、十九行目の「自去一日上池院」、二十行目の「内々可伺甲由」などが挙げられる。(なお、a雀頭筆は短鋒なので、和筆(小)よりかなり原本に肉薄した線が出せるので、唐筆と断定するには若干の躊躇が生じたが、色々の実践を積み重ねた結果、唐筆と結論したのである。)

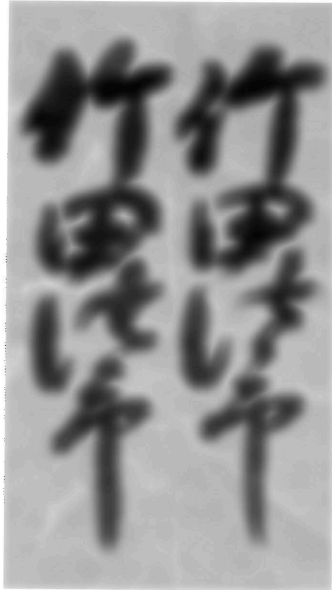


写真3 cグループ

かくして実際に、この唐筆で兼秀公記を影写してみると、その感じがびったりとつかめた影写をすることが出来たのである(写真5)。この兼秀公記は典型的な和様の書である。このような結果が得られたことからすれば、和様の書は、むしろ唐筆で表現した方が、その感じがつかめるのではないか。

ついでながら、この文書の中ほどには多年朝廷の書役として奉仕してきた世尊寺家の行季や持明院基春の名が見えるのは興味深いことである。

三

最後に、こうした唐筆による影写の経験から生まれた今後の研究関心を述べておきたい。

この兼秀公記との邂逅によって、今まで思いもよらなかった唐筆への道を切りひらくことができたのは幸いであった。このことを契機にして、今後はこれまで影写してきた多くの広橋家文書を再点検して、唐筆との関係を検討していかなければならない。すなわち、和様の書と唐筆の関係がどこまで、どのように一般化できるかという課題を、とりあえず広橋家文書に即して検討することである。

また、室町時代は、宋・元の文化、とくに水墨画・書蹟・工芸が彼我の禅僧によって続々移入された。とくに京都五山の禅僧の中には詩人や学者が多かったので、自然、蘇軾や黄庭堅の詩書が愛好珍重され、元の趙子昂が流行したといわれている。広橋兼秀も、その筆跡をみれば、多分にこの時代の波(流行)を享受していたのではないかと思われる。蘇東坡の李太白詩卷や黄山谷の寒食詩卷題跋などを彷彿させてくれると思うが如何であろう。

文具研究家の植村和堂氏がいわれるように、当然、中国からは、それ

らの水墨画・書蹟などと共に、墨・紙・筆も沢山将来された筈である。それらの唐筆は、平安時代に使われた唐筆とは大きさも製法も異なるものがあつたのではないかと思われるが、残念ながら現存しているものを知らない。毛も、恐らく山馬毛や羊毛なども使われていたのではないだろうか。このわたしの推測の根拠は、右の宿純羊毛(小)の唐筆による影写なのである。

今後も唐筆の探索を、影写の質を高めるためにも是非続けたい。中世の唐筆に関する情報をお持ちの方のご教示を賜りたい。

〔注〕

(1) 谷森直男氏所蔵文書(東京)。明治四二年、本所において撮影した写真乾板による。

(2) 本所の広橋家文書調査は、一九七五(昭和五〇)年より始まった。

(3) すってから一夜を経過した墨汁。

(4) 北宋の詩人、文章家。唐宋八大家の一人。号は東坡。地方官を歴任。書画をもよくした。

(5) 北宋の詩人。号は山谷。江西詩派の祖。師の蘇東坡とともに蘇黄と並び称され、草書にも秀でた。

〔付記〕 本稿をまとめるにあたり、兼秀公記の写真掲載をご許可くださった原本所蔵者の広橋真光氏に厚く御礼申し上げます。また、写真撮影は吉田成氏のお世話になりました。併せて御礼申し上げます。